

ある一男児の保育日記をめぐりて

附屬幼稚園

園児の母

杉山米子
久米京子

保育日記の一節

修了式の済んだ翌日、外にはうららかな日がさして、見渡す向ふの原には陽炎さへもへて居る。所在なきに居て何か氣落ちのした心に、昨日見送つた許りの、可愛いく三人の子供達のあの顔、この顔が往來する。未熟な身にも大過なく、入園當時のまゝの三十人を無事に小學校へ送る事の出来る幸を、何より喜ばなければならぬに……何故か淋しい。小さい頃お友達をおよびして一日楽しく遊んだ後、急に潮の引く様に一度にお友達の歸られた後に、私は今と同じ氣持を味つた事を思ひ出す。今遊んだ許りのトラムプが一枚、二枚散つて居る、お友達の坐られた時の儘並べられた坐布團がめい／＼放射線狀の坐り跡を残して……見廻して急にうすら寒さを覺えたものだつた。

× × × ×

私は卒業した子供達の個人日誌の頁を繰つた。毎日一人一行づゝ記した極く簡單なものだが、そこにはあの可愛い子供達の面影が活き／＼と躍つて居る。日々の事に追はれて、唯記録した儘で一人々々の縦の系統を落著いて見る事もなく過したが、今私は靜にそれを見乍ら思出を手繰らうとして居る。

× × × ×

Kさん、本當に幸せなお子さんであるKさん、すく／＼と伸びた若芽、近付くものは誰一人と愛さずには居られない様なお子さんだ。其のKさんの思ひ出、餘りにく／＼多いKさんの思出の中から……

× × × ×

四月×日 今日は何となく元氣がない、しかし動作は別に

にだるさうでもないが。

四月×日 皆で鬼ゴッコをして居て誘つたが、さうして
もお部屋から出なかつた。

四月×日 午前中外へ出なかつた。午後やつミテレスの
所まで出た。

普段元氣なKさんにしては珍しく、一三日元氣がない
／＼云ふ日誌が續いた。年長組として登園し始めてから
すぐの事だつた。いつにない事で、何か病氣の前兆でも
ないかとお辨當の時氣を付けて見ても食欲には別に變りは
ないらしい。お仕事も自分からキチン／＼して動作もだ
るさうな様子はない。それなのに何さなく元氣がない。氣
がかりなまゝに或朝お母様に伺ふと、此の数日お家へ歸る
と晝寝をしますとの事、矢張り何か疲れて居るのだと思
ふ。でも未だ幼稚園が初つてからほんの数日、疲れる程の
原因も思ひ當らないので、日誌を遡つて見た所が、不思議
な事に、ついお正月休みが終つて間もない頃にも今と同じ
様な形に元氣のない事を案じた日誌が数日つゞいて居た。
ふと思ひ當つて前年の夏休み直後の日誌を見た。あゝやつ
ぱり……學期始めに、きまつて同じ形に元氣のなくなるK
さん、私はつひ此間始めの日に、「海の組になつて皆さんは
幼稚園のお兄様やお姉様におなりになつたのよ、好いお兄
様、お姉様におなりになつて、川や森や林の組の小さい方
達に恥かしくない様にしませうね」云つた時の、眞面目な

餘りにも輝いて居たKさんの瞳の色を思ひ出した。そして
私は湧上つて来る微笑を感じ乍ら、一方では何さなく涙の
浮かぶ心だつた。眞面目なKさんは、いつもお休みが終つ
て幼稚園が始まるまで、きつと改つた氣持で、そこはかさな
い自覺を持つのだ。そして今度も、大きな組になつての自
覺を、覺悟を、あまり大きなものに考へ過ぎて仕舞つたの
だ、自分で動きのこれない程、よいお兄様、小さい組のよ
いお兄様にならうと固く／＼覺悟してしまつたのだ。可哀
さうに……

其の翌日は本當にのびやかな春らしい日であつた。朝から
ござ、やかん等の用意をして子供達にはお辨當のバスケッ
トを持たせて、本校の廣いグラウンドへ出掛けた、巻いた
ござをM夫さん、Kさん、N夫さんに領ける。「爆弾三勇
士だ／＼」と大喜び、Kさんも今日は流石に元氣だ。フィ
ールドの芝が青々芽吹いて、さころ／＼濃緑の群に白く
點々見えるのは早咲きのクローバーが、グラウンドの上
の八重櫻がホッテリゆれて居る、子供達は歡聲をあげて
かけ出した。バスケットもござも投げ出して……

其の一日の面白かつた事、私も入れて二十何人、土手中
探がして可愛い「つくし」を三本だけ見付けたのも此の日、
ポトリミ花の形のまゝ落ちた八重櫻は勳章に、思ひ切り廣
々とした所で鬼ゴッコもした。靴の裏が芝でツル／＼にな

る迄。皆わけもなく大きな聲で笑つたり叫んだりして居た。本當に楽しかつた一日、だが此の日の何よりの收獲は殻を抜けたKさんが。又すつかり以前の潑刺さを取戻した事だつた。

母親の感想

『新らしい環境に對して非常な抵抗を感じる』云ふ事は、あの子が幼少の頃からの一つの目立つた特徴でした。満二歳に近い頃にこんな例があります。その秋逗子の親戚を訪ねた折に、あの子は始めて海を見たのです。お家の砂場の何倍あるかわからない廣い廣い砂場を喜々として走つて行つた彼が、渚に近い砂丘を駆け登つた折に、思ひがけなく、今しも沈まうとしてゐる眞赤な夕陽をのせたあの子くましい波の姿を、身近に見出した時の事です。あの子は自然の偉大さ神祕さの前に、完全に眩惑された様に、固く父親の手を握りしめて、面に異様の感動を浮べたまま、ぢつと海を見つめた儘立ちすくんで居るのです。そして促されても一步も前進する事を肯じないでゐるのです。一年置いて満四歳の夏、二週間餘りを海岸に過した事があり、此の時も二つ年下の妹が何の怖れもなく喜々として波に戯れるのに反して、あの子は、父親がみんなに心を碎いて誘はうとしても、さうしても海になじむ事が出来なかつたのです。引上げなければならぬ頃になつて、や

つと海の面白が判りかけて來た様でした。そして海に心から親しんだのは、その翌年の夏からでした。新らしい環境になじむのに、こんなに暇ざるあの子が、幼稚園のお世話になる様になつた時は、家の者達が何よりも此の點を氣遣ひました。あの頃の日記を繰つて見るに、家の者が打揃ふさいふ理由で大好きだつた日曜が、今度は反對に大嫌ひになる程、幼稚園を好んで居ました。それなのに團體さいふものに全く始めて加はつたあの子の疲れ方は非常なものでした。歸宅後理由もなくむづかる事が多く、初めの日は二三時間程手もつけられない程むづかり翌日は之が三十分程續き、第五日になつて始めて平常に復した程でした。此の間中には珍らしく夕方四時か五時にはもう床について、夕食も攝らずに、朝まで一眠りに眠つて了ふのでした。こんな風であの當座は食欲も振はず、體重もすつと減つて居ます。新學期が始まる毎に、程度の差こそあれ、何時も似通つた事が起つたのです。そして何時も先生の御心配の種になつたわけです。

家中の者が何時もあの子の神經を過度に刺戟したり、疲れさせたりする事を恐れて、日常の生活が凡て子供本位に運ばれて居た爲に、新らしい環境は、何時もあの子を餘分に疲れさす事が多かつた様です。少しづつは訓練を續けて行つた方がよかつたかしらん、何時も考へなほして居りま

す。

保育日記の一節

六月×日 今日も一日中お砂場、今日はさうく終日お仕事に入つて來なかつた。

「Kちゃん、Sちゃんがお部屋でタンポボ寫生してるよ、僕もしやうかなあー。」

「……………」答へはない。

「ねえKさんも寫生しない？」

「いや。」

寫生を誘つて居るのは氣の弱いHさん、みんなにし度い事があつても、一人では敢てする事をしないお子さん、Kさんは其の誘ひをにべもなく斷つて、ひたすら積木電車を片手に四這ひになつてお砂場中を走らせて居る。行く所トネルや鐵橋を作る。勢よく電車を走らせるこそそれが崩れる、又作る。今朝からすつと續いたお遊び、いや、今朝からさうごころか、今日でもう一週間許りも此の遊びがつゞいて居るのだ。間で日曜がはさまつて忘れるかと思つたのに、月曜には又忘れずに、お早やうさ云ふが早いか積木電車で四這ひなのだ。

「海の組おーべんきーく」

歌の様に節をつけてよび合ひ乍ら、逸早く皆がお部屋へ

入つて來る。急に人影のなくなつたお庭にたつた一人お砂場のKさん。

「Kちゃん、お辨當よ。」

F子さんがお姉様の様に優しく聲をかけた。

「いやだァー、僕之して居るんだものォー。」

F子さんが呆れた様な困つた様な顔で、私の救ひを求め様に振返つた。私は未だ背中を向けて居るKさんの後姿を眺めながら、若し他のお子さんがお食事を待つて居るのてなかつたら、もう聲もかけずにそつと置いて置き度かつたのだ。こんなに打込んで居るものを、こんなに自分で自分の生活を築いて居るものを……。

母親の感想

『自分自身の興味から生活を築く』こいふ事は妹と對照して、家庭でも非常に目立つ事柄です。あの子の描畫能力が、所謂錯畫時代を経過した頃、あらゆる興味が自動車に集中して、來る日も來る日も街に出て、幾時間も立ちつくしては、次から次から來る自動車に眺め入つた事がありました。併し憧れのスマートな流線型の自動車を、スラ／＼と畫に表現出来ないもごかしさを、何時もあの子は感じて居たのです。こころがさうく一案を案出しました。おびたゞしい數の銅貨を集めて、これを疊の上に並べるこいふ

(四一頁より)

の聲もあり、幼児の遊びを計畫的に、有目的保育へこいふ倉橋先生の理論的なお話が具體的な保育内容になつてドシドシ發展した、幼児の毛筆は大正の半頃から、木工は大正の終り頃から幼児保育に實際化して來て、幼稚園の子供の生活は益々内容が豊になつて來た。

その頃(大正三年から十五年)の幼児、否、園児は新入期によく泣いた、そして自分の思ふやうに描寫出來るのは小學校には入る前の年の二學期終り頃から(例外はある)であつた。

現在の園児は新入期に泣くのが少い。自分の思ふやうに描く事は小學校には入る前の年の一學期はじめ頃から出來る、文字數字、實數に對する興味が早くから出る、智恵づき方が大層早くなつた。社會問題、時事問題を心にこめてゐる。目によつて體格のよしあしはさしてわからぬが、その頃には聞いた事もなかつた幼児の病氣が近頃増した。中耳炎、百日咳、自家中毒症、嗜眠性腦炎等。

その頃の幼児は、既に成長して、現在大陸日本に働いて居る。

その頃の私は、世に母さへあれば幼稚園は無くともよいと思つてゐた。

現在の私は、幼稚園が無ければ國民教育の基礎は完全し

ないと思つてゐる。

(四九頁より)

事でした。この方法を案出したあの子は、後には疊一帖もある大きな自動車を、巧みな曲線で描き出す技術を習得したのです。家の者達は一錢銅貨の蒐集と消毒に心を使ふ日が續きました。毎日新しい觀察が追加されて、細部から細部にわたつてゆきました。いゝ自動車が出來る毎に悦に入るこいふ具合でした。それが一通り済むと、今度は紙で自動車の形を切り抜き、扉や窓を開閉出來る様に、あの子の技術には過ぎる様な問題を解決しようと思ひます。自動車の玩具もなか／＼氣に入るものがありませんでした。自分の興味本位に生活を築き、自分の學習のプランを追つてゆく事が、あまりに濃厚なあの子は、仲々扱ひ難い子でした。幼稚園に入れて頂いてからは多方面な豊かな刺激も與へられ、様々な個性にも接し、團體的な訓練も受けたせいか、あの子も圓満になつて來た様です。而し幼稚園の様に自由な所でさへ、自分の興味を幼稚園の日課の間に幾分の不調和を感じてゐたらしい様子が見えます。小學校に入つて、一層一定の教育課程を踏まなければならぬ。あの子は、この様にして調和を見出してゆく事でせうか？。